

第一部

前身諸学校の校長・学長

愛知医学校 校長

後藤 新平

(ごとう・しんぺい 任一八八一〜一八三〇)

名古屋大学医学部の前身である愛知医学校の校長を、一八八一年から八三年にかけて務めた後藤新平（一八五七―一九二九）は、安政四（一八五七）年、水沢藩士の子として陸中国胆沢郡塩釜村（現在の岩手県奥州市）に生まれました。水沢藩が戊辰戦争で明治新政府に敵対したため、貧しいうえに出身者への世間の風当たりもきつく、苦学を強いられましたが、福島県の須賀川医学校で勉学に励みました。



そして一八七六（明治九）年、医師として初めて就職したのが愛知県公立病院（八一年に愛知病院と改称）でした。安月給の三等医ですから、経済的には恵まれないポストでしたが、当時は病院内にあった医学校には、お雇い外国人ローレルと司馬凌海という、ドイツの医学や衛生学を学ぶには当代最高の人物がおり、後藤が経験を積むには最適であったといえます。七七

年に西南戦争が勃発すると、大阪に設けられた臨時病院で外科医として勤務しました。これにより医師として自信を深めると、翌七八年には公立病院に復帰し、それからめざましい出世をとげました。正式に医学校長兼病院長になったのは八一年、二四歳の時ですが、すでに七九年から代理や心得として学校と病院の経営にあたっていたのです。

当時の愛知病院は、まだ内科と外科の区別もないような状態で、あらゆる面において早急に基礎を確立する必要に迫られていました。後藤校長は、思い切った人事を断行し、ローレツの後任には超高給取りの外国人ではなく、当時きわめて貴重だった日本人医学士を四名も採用しました。奈良坂源一郎や次項で紹介する熊谷幸之輔といった、後藤校長が去ったのちの愛知医学校を担った人材もこの時に着任しています。そして彼らを中心にして、組織の大幅な改編をおこないました。その結果、愛知医学校は全国的にも有名になり、八三年には全国でも数少ない甲種医学校に選定されました。もしこの時、位置づけとしては一段下の乙種にあまんどいていたら、愛知医学校ひいては名古屋大学の歴史も少なからず変わっていたかもしれません。

後藤校長の活動は、地域の衛生行政の確立にもおよびました。後藤新平といえは、とにかく計画立案が好きで、大きな構想を打ち上げる人物として知られています（「大風呂敷」との異名もあります）。この性質は、すでに愛知医学校時代から発揮され、いくつかの建白書を愛知県や明治政府に提出しています。さらに自ら県内の有志にはたらきかけ、一八八〇年には衛生

活動の自治団体である愛衆社を設立しました。これは、その三年後に創立される大日本私立衛生会の先駆けともいえるものであり、後藤校長の先見性を見ることが出来ます。その活動は県の枠をこえ、実現はしませんでした。愛知・岐阜・三重三県の医学校を統合する構想も提唱しています。また、この時代のエピソードとして、「板垣死すとも自由は死せず」で有名な、八二年の岐阜における板垣退助遭難事件があります。自由党と関わって政府にいらまれることを恐れて誰もが尻ごみするなか、後藤病院長が板垣の診察にかけつけた話です。

そして一八八三年、後藤は内務省衛生局に入り、官僚としての道を歩むことになりました。日本にドイツを範とする衛生行政を確立したのち、日清戦争で日本が獲得した台湾において、九年から一九〇六年まで八年余りにもわたって、台湾総督府民政局長および民政長官という総督に次ぐポストにあり、植民地行政を軌道にのせるという大きな業績を残しました。

その後、日露戦争（一九〇四〜〇五年）で日本が得た満蒙（中国東北部）権益の核ともいえる満鉄の初代総裁に就任、さらに桂太郎の信頼を得て、桂内閣期における通信大臣（鉄道院総裁や拓殖局総裁なども兼任）、さらに寺内正毅内閣（一九一六〜一八年）では、内務大臣、外務大臣を歴任しました。その後、東京市長となり、さらに一九二三（大正一二）年に関東大震災で東京が壊滅すると、内務大臣兼帝都復興院総裁となつて東京の復興計画を立案するなど、近代日本を代表する官僚・政治家として幅広く活躍したことは、ご存じの方も多いかと思えます。

愛知医学校・愛知県立医学校・愛知県立医学専門学校 校長

熊谷 幸之輔

(くまがい・こうのすけ 任一八八三〜一九一六)

医学部の前身にあたる愛知医学校・愛知県立医学校・愛知県立医学専門学校の校長を三〇年以上にわたって務めた熊谷幸之輔(一八五七―一九二三)は、安政四(一八五七)年、現在の秋田県仙北郡美郷町六郷に生まれました。生家の熊谷家は、地元の熊野神社の社家で、本来なら長男である幸之輔が後を継ぐはずでしたが、志を立てて一六歳で上京、一八七三(明治六)年に第一大学区医学校へ入学し、同校などを再編した東京大学医学部を八一年に卒業しました。

医学部の同期生には、のちに陸軍軍医総監となり、そして小説家としてつとに有名な森鷗外や、熊谷とともに愛知医学校や愛知医専を支えて「熊谷あつての奈良坂、奈良坂あつての熊谷」とも言われ、著名な解剖学者となった奈良坂源一郎などがいました。

そして一八八一年、後藤新平校長の招きをうけた熊谷は、奈良坂らとともに愛知医学校の一等教諭として



赴任しました。当時の医学士はきわめて希少な存在であり、熊谷の月給は一二〇円と、後藤校長の月給九〇円を大きく上まわっていました。熊谷は、後藤校長の改革を担う人材として期待され、着任した年に愛知病院の外科医長に就任しました。そして早くも、八三年には愛知病院長、同年まもなく愛知医学校長に任じられたのです。

さて、一八八三年に甲種医学校として認定された愛知医学校ですが、熊谷の校長時代の前期は、存続にかかわる大きな危機が連続するなど、苦しい時期でした。

まず、一八八六年の中学校令をうけて全国五つの学区に一つずつ設置された、高等中学校の医学部になれなかつた府県立医学校は、地方税による経営を禁じられたのです。これは、愛知医学校にとつて廃止宣告とすらいえるものであり、熊谷校長にも、高等中学校医学部長就任の内示があつたといえます。しかし熊谷校長は、県立ながら独立採算制となつた愛知医学校に残ることを決意し、教職員一丸となつた諸改革に取り組み、財政難に悩みながらも何とか経営を続けました。この時に生き残つた府県立医学校は、愛知以外には京都と大阪しかありません。

さらに一八九一年、浄土真宗三派（本願寺派・大谷派・高田派）が愛知県に対し、愛知医学校・愛知病院の払い下げを請願するという騒動が起きました。浄土真宗三派は、七三年に愛知県公立病院（愛知病院の前身）が再興される際、その設立資金として巨額の寄付をした経緯をもっていました。ただ浄土真宗側も熊谷校長を高く評価し、その留任を前提としての払い下

げを求めていたのです。これに対し、医学校と病院の経営難に悩む熊谷校長は、宗教的な干渉が学問の領域に及ぶことがないのであれば、との条件付きでこれに賛成の立場をとりました。しかしこの時、県議員や名古屋の開業医、そして医学校生たちなどによる、激しい反対運動が起こりました。地方新聞各紙も、浄土真宗や熊谷校長を激しく攻撃しました。このいわゆる院校払い下げ事件は、まもなく県知事が請願を却下したことで落ち着きますが、熊谷校長は辞意を表明しました。しかし県は慰留し、学生も責任を追求することはず、留任することになったのです。払い下げに賛成したことはともかく、熊谷校長の手腕は広く認められていました。

在任前期とは対照的に、中期から後期においては、比較的順調な学校経営ができたといえるでしょう。一八九〇年代半ばあたりから経営が安定し、教職員の数も増え、設備の充実も進みました。一九〇一年に愛知医学校は愛知県立医学校と改称、さらに〇三（明治三六）年に愛知県立医学専門学校となります。そして一九一四（大正一三）年、天王崎（現在の名古屋市中区栄一丁目）から、現在も名古屋大学医学部と附属病院がある鶴舞への移転を実現させ、施設の老朽化・狭隘化という年来の大問題を解決したのです。

鶴舞移転を見とどけた熊谷校長は、一九一六年、老齢と病気を理由に辞任しました。一八年に愛知医専の玄関前に建てられた熊谷の銅像は、のち戦争のため供出されてしまいましたが、戦後になって再建され、現在も鶴舞キャンパスに置かれています。

名古屋医科大学学長

田村春吉

(たむら・はるきち 任一九三二〜三九)



名古屋大学医学部の前身である名古屋医科大学の学長を、一九三二（昭和七）年から七年余りにわたって務めた田村春吉（一八八三―一九四九）は、一八八三（明治一六）年、東京府京橋区桶町（現在の東京都中央区）に生まれました。東京府立第一中学校から第一高等学校に進学し、一九〇五年に卒業、東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に入学します。卒業後も皮膚科教室に残って研究を続け、一六（大正五）年、愛知県立医学専門学校教諭（のち教授）として名古屋に赴任しました。鶴舞キャンパスに移転して間もない頃です。

その後、ヨーロッパへ三年近く自費で留学して研さんを積み、二三年に愛知医科大学教授（皮膚病花柳病学担当）となりました。二六（大正一五）年には附属医院長に任じられています。そして三一（昭和六）年、愛知医科大学が官立移管され、名古屋医科大学教授に

就任しました。この時、愛知医学校出身で医専以来の教員であった教授らが、移管後の教授に任命されなかったことに、学生や助手、学友会などが反発し、文部省も巻き込む人事紛争が起きました。まもなく解決はしたものの、藤井静英学長は辞任し、後任に田村が就いたのです。

田村は、学長就任を承諾する時、文部省に対して予算の増額を主張して譲らず、加藤鏖五郎りょうごろう衆議院議員（愛知医専卒業生）の尽力もあって、それを認めさせました。これは官立移管に際し、以後一〇年間、政府支出金は出さないと条件が付けられていたことが背景にあります。

その後も田村学長は、時にワンマンとも言われるような采配ぶりです。政府支出金の獲得、予算の特定分野への重点配分の断行などによって、着実に施設を充実させていきました。

そして何と言つても、田村学長が名古屋帝国大学創立の大きな立役者であったことを忘れてはならないでしょう。田村学長は、就任当初より名医大を基礎として総合大学を創設することに情熱をかたむけました。持ち前の行動力と政治力で、地元、とくにこの頃人口が一〇〇万人に達し、工業の発展も著しかった名古屋市の政財界やジャーナリズムにその必要性をうったえました。加藤鏖五郎衆議院議員がその熱心さにあきれるほどで、当時「総合大学君」とあだ名を付けていたと回想しています。また、政財界人が集まった席において愛知県知事が博物館を建設する計画を発表すると、田村学長は同じ席においてこれに堂々と反対し、総合大学を創設すべきことを主張して、知事を翻意させたというエピソードも残っています。

第八高等学校 校長

大島 義脩

(おおしま・よしなが 任一九〇八〜一八)

名古屋大学旧教養部（一九九三年廃止）の前身にあたる第八高等学校（一九〇八〜一九五〇）の初代校長、大島義脩（一八七一〜一九三五）は、一八七一（明治四）年、丹波国氷上郡佐治村（現在の兵庫県丹波市）に生まれました。生家の蘆田家は、佐治村の大庄屋を世襲する豪農でしたが、義脩は四男で、幕末期から家政が苦しくなっていたこともあって、八歳の時に母の実家である大島家へ養子に入りました。大島家は、江戸時代は旗本小出家の家臣で、当主

貞敏は義脩の叔父でした。

大島は、判事であった養父貞敏の下、当時にあつては最高の教育を受けました。長崎県中学校では首席を占め、一八八六（明治一九）年には貞敏の大阪転任にもなつて、当時は大阪にあつた第三高等中学校予科に移りました。同校本科をきわめて優秀な成績で卒業し、九一年に帝国大学（現在の東京大学）に進学しま



す。高等中学校では数学の成績が抜群だったとありますが、文科大学（文学部）哲学科を選びました。ここで大島は、カントやショーペンハウエルなどのドイツ哲学を学びました。哲学科の同級生には、のちに日本を代表する哲学者となる西田幾多郎などがいましたが、大島は常に首席の座にあり、卒業もトップでした。九四年の卒業式には、文科大学卒業生代表として答辞を述べています。とくに優秀さを認められて大学院に進学し、倫理学を研究しました。

そして一八九七年、大島はいきなり第四高等学校（金沢）教授に任ぜられました。二七歳の時です。そして九九年には文部省専門学務局の視学官となり、約九年間その任にありました。その間、東京音楽学校（現在の東京芸術大学の前身）教授、さらに校長を兼務し（次項で紹介する渡辺龍聖の後任）、一年半ほどの短い期間でしたが、学校経営の経験を積みました。校内規則を改正し、学校の肅正を進めたとされています。そして一九〇八年、愛知県愛知郡呼続町（現在の名古屋市瑞穂区）に創立された第八高等学校の初代校長として赴任することになりました。

三八歳で就任したこの若き校長は、それまで高等学校ではおこなわれてこなかった新しい方を策を次々に実行に移しました。学生指導における指導教官制度、事務組織における課長制度、創立一〇周年の記念祝賀式の挙行、公認下宿制度、各種運動の奨励と選手制度の否定、などがそれです。また施設面では、宏壮な講堂、娯楽施設としての茶寮、奉安殿（天皇・皇后の肖像

写真を安置する施設)の建設などがあります。多くは大島校長が考案、あるいは新工夫を加えたものでした。これらの方策・施設は、全国的にも注目され、多くの学校で取り入れられてきました。

その中でも、八高の異名ともなった有名なものとして、軍事教練と現役将校などによるその検閲講評があります。これは、八高創立当初から実施された、高等学校では初めての試みで、学校を国民的修養の道場と見なし、厳格な心身の鍛錬を重視する、大島校長の創意によるものとされます。その背景には、大島校長が大学卒業直後の日清戦争期に一年志願兵となり、その後も勤務演習や日露戦争で召集されて、陸軍歩兵中尉の階級を持っていたことがあるようです。教練の検閲には、大島校長自らが熱心にあたったといえます。こうして「教練八高」の呼び名が確立しました。

このように大島校長は、次の校長の言葉を借りれば、「規律厳正の中に自己啓発の自由を残し、伝統を尚たっとばしめつつ新機軸を重んぜしめる」学校運営をおこなって基礎を固め、一九一八(大正七)年に八高を去りました。その後、女子学習院(官立、現在の学習院女子大学)の初代院長、帝室博物館総長などを歴任しています。

名古屋高等商業学校校長

渡辺 龍聖

(わたなべ・りゅうせい 任一九二一〜三五)

名古屋大学経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校（名高商、一九二〇〜一九五二）の初代校長である渡辺龍聖（一八六二？―一九四五）は、文久二（一八六二）年（一説には一八六五年）、越後国古志郡吉水村（現在の新潟県長岡市）で加藤周淨の長男として生まれ、のちに渡辺伝蔵の養子になったとされますが、あまり詳しいことは分かっていません。



渡辺は、一八八七（明治二〇）年に東京専門学校（現在の早稲田大学）を卒業し、帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）哲学科に入学、八年からアメリカに留学し、ニューヨーク州のコーネル大学大学院で哲学博士号を取得しました。日清戦争中の九四年に帰国し、九五年に高等師範学校（現在の筑波大学）の教授となり、一九〇一年には東京音楽学校の校長となりました。この当時の学生に滝廉太郎がいます。その後、清国（当時の中国）の袁世凱（のち

の中華民国大總統)の学務顧問、文部省の清国視察団長などを歴任、ドイツへも留学したのち、一九一一年、新設された小樽高等商業学校(現在の小樽商科大学)の初代校長に就任しました。この小樽高商での経験が、のち名高商で存分に生かされることとなります。

やがて渡辺は、名古屋に高等商業学校を設置すべきことを文部大臣に進言したり、創立委員長を務めるなど、その設置前から名高商に深く関わりました。そして一九二〇(大正九)年、愛知県と名古屋市からの多額の寄付によって官立名古屋高等商業学校が設置されると、翌年には初代校長に就任しました。以後、約一四年間にわたって、名高商の経営の任にあたります。

渡辺校長は、小樽高商で実践した教育を、名高商でさらに発展させていこうとしました。その特徴の一つは、第一学年において、基礎的な商業科目以外の教養科目にもかなりの時間を割いたことです。これは、経済人の卵である学生たちに、教養豊かな紳士としての風格を求める渡辺校長の教育方針によるものです。また、第二・第三学年の専門科目においても、商業実践、商品実験、商工心理、能率研究など、それまであまり重視されてこなかった、実践的な科目を積極的に取り入れるとともに、その近年にアメリカで生まれたケースメソッド教授法を日本の高等商業学校で初めて試みました。また企業実践の実習のため、校内に印刷工場を建設しました。そして、これらの教育を担う気鋭の教員を全国から集めました。

また、名高商が廃止されるまで続いた校風を確立したのも渡辺校長です。それは、「学生は

学生らしくあること」、「学生は学生の本分を忘るるな」という「二大信条」に集約されるものですが、これを規則や命令ではなく、個性の違いを尊重しつつ、学生の自発性を喚起して実現したところにその真価がありました。こうした名高商の校風は、全国でも有名になったといえます。さらに、教養科目を重視したこととも関係しますが、高い人格を持つ経済人たることを求める人格主義教育を唱えました。第一次世界大戦が終わり、これからは国際経済競争の時代になると予測する渡辺校長にとつて、高等商業教育とは国の代表として外国と対峙する人材を育てることだったのです。またその背景には、留学時代に学んだアメリカの功利主義・実用主義的な哲学がありました。欲望を否定せず、これをいかにコントロールするかを追求した渡辺の倫理学は、この時代の高等商業教育に適合的であつたともいえます。

このように、教育方針や校風を確立し、名高商の名高商たるゆえんをきざぎざ上げたのが渡辺龍聖初代校長でした。渡辺は、一九三五（昭和一〇）年に校長を退き、小樽高商時代からの片腕であつた国松豊に後事を託しました。その後、渡辺は名古屋市内に居をかまえました。敗戦の直前に亡くなりました。その墓所は、現在の名古屋大学東山キャンパスにほど近い、八事の興正寺にあります。また、経済学部の中庭（キタン庭園）には、キタン会（経済学部同窓会）によつて建立された渡辺龍聖像が後輩たちを見守っています。

岡崎高等師範学校 校長

水野敏雄

(みずの・としお 任一九四五〜四六)



名古屋大学教育学部の前身にあたる岡崎高等師範学校（一九四五〜一九五二）の初代校長、水野敏雄（一八九三―一九八二）は、一八九三（明治二六）年、中学校の教員であった水野喜太郎の長男として東京市に生まれました。のち父の赴任先である福島県に移り、県立会津中学校を卒業後、一九二一年に第一高等学校に入学、一四（大正三）年には東京帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）の哲学科に入学、教育学を専攻しました。卒業後、文部省に入りますが、二〇年には山口高等学校教授（哲学・ドイツ語）となり、二七年には東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）教授（倫理学）となりました。三七年に文部省へもどり、教学局指導部指導課長などを歴任し、一九四五年（昭和二〇）四月、新設の官立岡崎高等師範学校（岡崎高師）の校長に就任しました。高等師範学校は、主に中等学校の教員を養成する学校

です。

岡崎市の二〇年にわたる誘致運動が実り、さらに同市による土地や建物の寄付によって設置された岡崎高師でしたが、時代は戦時期しかも敗戦の四カ月前という、まさに最悪とすらいえました。したがって、水野校長の苦心も並大抵のものではありませんでした。

学科を見ても、戦争の国策に合致する理科のみしか認められませんでした。正規の付属学校も設置が認められず、当分の間は代用付属学校を置くこととされました。また、校地や校舎も、岡崎市立工業学校のを転用することになり、教授用の設備については、四年かけて徐々に整備するとされていたのです。教員も、定員一八名のところ、設置と同時に着任した教官は水野校長ほか三教授のみ、以後しだいに充実していったものの、定員を満たすことができませんでした。物不足のため、入試要項の印刷すら満足におこなえなかつたといえます。ただ全く希望がなかつたわけではなく、第一回入試には、定員の約二三倍もの入学志願者が殺到し、優秀な学生を迎えることができました。しかし、合格発表の一週間後には戦時教育令によって学業が事実上停止され、そして七月二〇日の岡崎空襲により、校舎のほとんどが焼失してしまったのです。

したがって敗戦後の復興は、水野校長自身の言葉を借りれば、まさに「ゼロから再出発する」ことになりました。水野校長は当時の状況を、「…わが校は孤立無援、微力ながらお互い

の力の限りを出しあつて、開校^{そうぞう}匆々の難局を乗り越えようとする悲壮な気魄^{きはく}に溢^{あふ}れていた。」と回想しています。仮校舎での学校運営のかたわら、水野校長にとって焦眉の急は、本格的な移転先の確保でした。しかし、岡崎市内には適当な校地や校舎が見つからず、水野校長は岡崎市を離れて豊川市の旧豊川海軍工廠施設へ移転するという、苦渋の決断をすることになりました。

それでも水野校長は、イギリスの詩人ワーズワースの詩の一節、「High thinking and Low living（想いは高く、生活は低く）」を口ずさみつつ、模倣ではなく新しいものを創始することをめざす清新な学風を興すべく、新天地での本格的な学校経営に乗り出しました。水野校長が回想するように、それは多分にやせ我慢が含まれていたかもしれませんが、全てはこれからでした。しかし、一九四六年五月、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の指示による、いわゆる公職追放令によって、水野校長は職を退かなければならなかったのです。その一年余りの任期は、まさに苦難に暮れたともいえました。

一九五〇年に公職追放を解除されてからの水野は、日本育英会理事、のち理事長として活躍したのち、六二年から六八年まで島根大学の学長を務めました。